

# 天神畑(てんじんばた)遺跡出土の鎌倉時代の轡(くつわ)について

## 1. 調査の経緯

天神畑(てんじんばた)遺跡は、高島市鴨地先にある遺跡で、奈良時代から平安時代の集落跡として周知されています。

滋賀県高島土木事務所が計画する鴨川補助広域基幹河川改修事業に伴い天神畑・上御殿遺跡内で計画されたことから、平成19年度に試掘調査を実施しました。その結果に基づき、発掘調査を平成20年度から実施しています。

## 2. これまでの発掘調査の成果

これまでの調査では、縄文時代から近世に至る多彩な遺構・遺物が多数見つかっています。縄文時代の埋甕、弥生時代の墓(方形周溝墓)、平安時代の建物や溝を検出し、それぞれの時代の土器や木製品が数多く出土しています。特に、室町時代の経典を墨書した柿経(こけらきょう)も川跡から出土しました。

また、平成22~23年度調査では、古墳時代に渡来人によってもたらされた建築物のひとつである大壁建物(おおかべたても)も確認され、注目を集めています。



## 3. 鎌倉時代の轡(くつわ)について

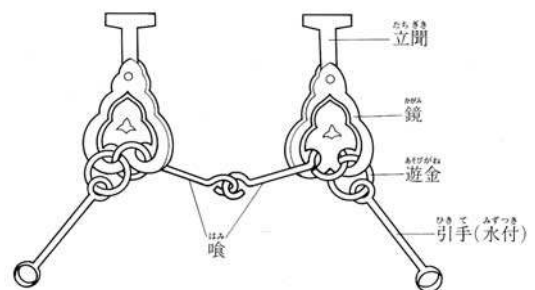
### (1) 出土状況

これまでの調査では、天神畑遺跡を中心に古い川跡が2本見つかり(古い八田川と古い青井川)、これらが合流していたことがわかりました。これらの川は、古い鴨川とも合流しており、多くの川の流れが集まる場所であったことが窺えます。川の中からは弥生時代後期から中世にかけての遺物が多く出土しました。川の流れは緩く、澱んだような状態であったと考えられます。

今回、平成22~23年度の発掘調査によって、この弥生時代から中世まで流れていた川跡の上層から、鎌倉時代の土器(12世紀末から13世紀)と共に轡(くつわ)が出土しました。

### (2) 轡とは

轡は、馬の口にくわえさせて使用する馬具です。手綱(たづな)と連動しており、騎乗者が馬を制御する上で欠くことのできない役割を果たします。馬にくわえさせる部分の喰(はみ)の両端に遊金(あそびがね)を連結し、手綱に繋がる引手(ひきて)と、馬の頭の面懸(おもがい)に繋がる鏡板(かがみいた)と立聞(たちぎき)からなります。



『日本馬具大観3 中世』より

### (3) 出土した轡の特徴

出土した轡は鉄製の鍛造と鋳造の複合品で、2連の喰(断面四角形)の両端に遊金を連結して鏡板と引手が繋がっていますが、片側の鏡板の透かしの内側と引手は欠損しています。三つの山形を呈する鏡板の中央に三葉形の突起を鏡板の形に沿って切り透かしています。一般に鏡板の形が杏(あんず)もしくは銀杏(いちょう)の葉に似ていることから杏葉轡(ぎょうようぐつわ)と呼ばれます。この鏡板は、鋏で立聞と連結され、立聞の先端は方形を呈しています。また、

遊金には差縄（さしなわ）（馬をひく縄）の紐らしき繊維質が残っています。

なお、大きさは、幅が約 23 cm（喰の長さ約 14.5 cm）、立聞の長さ約 10 cm、引手の長さ 13 cmを測ります。

#### (4) 轡の評価

日本の馬具は、5世紀、古墳時代に大陸から乗馬の風習と共に伝わってきました。なかでも轡は、古墳からの出土例を除くとほとんど知られていません。

今回出土した轡は、鉄製のため全体に錆びていますが、川跡の土層内で密閉されていたため、状態は良好です。この杏葉轡は、『平治物語絵巻』（へいじものがたりえまき）や『蒙古襲来絵詞』（もうこしゅうらいえことば）などの戦記物に描かれた馬に装着された轡に、その形を見ることができることから、中世の武士たちが使ったシンプルな実用品の轡と考えられます。相伴している土器も平安時代から鎌倉時代を通じて使われたものです。

これまでに知られている中世の轡は、伝世品に限られます。高津古文化会館所蔵（京都府）の杏葉轡や東京国立博物館所蔵（東京都）の杏葉轡（共に鎌倉時代）、二荒山神社蔵の杏葉轡（栃木県：室町時代）、御嶽神社所蔵の杏葉と宝珠を透かす轡（東京都：鎌倉時代）の例があるにすぎません。いずれも祭祀用や儀式用のもの（唐鞍（からくら）の皆具（かいぐ）と呼びます）です。

今回出土した轡は、中世の出土資料としては初めての例であり、状態が良好で中世の馬具の変遷を考える上で貴重な資料と言えます。

## 4. まとめ

### (1) 轡から見えてくるもの

今回、天神畑遺跡から出土した鎌倉時代の轡のもつ意味について考えてみたいと思います。

まず一つは、この時期の時代背景です。当時、この地域は源頼朝や源義経が北陸への交通路として重要視し、その後、近江守護職の佐々木一族などの武家が台頭します。調査区から現鴨川を挟んだ南側には、式内社の志呂志（しろし）神社が鎮座しています。興味深いことに、この神社には 1187 年(文治 3 年)に源頼朝が 10 貫文の社領を寄進しています（『高島郡誌』）。頼朝かどうかは別にして、当時の武将たちが重要視した神社であれば、戦勝祈願などの目的で馬具をこの神社に奉納したことが考えられます。そして、何らかの要因で神社に奉納された馬具の一部が、この川に紛れ込んだ可能性も考えられます。

なお、『高島郡誌』等によると志呂志神社は、2 体の御神体の内の 1 体である女神像が、もともとあった藪ヶ原（現在の北鴨）から現在の位置に遷されたことにはじまるとされています（12 世紀頃）。その後、頼朝が寄進した 10 貫文の社領は、永禄年中(1560 年頃)に延暦寺の僧徒によって略奪されています。

もう一つの見方は、今回の轡が出土した川跡の同じ土層から馬の歯や骨も一緒に出土していることです。発掘調査の成果から、古代から中世の遺跡から出土する動物の歯や骨の出土例は、食用以外には、何らかの祭祀に関わるものと考えられています。たとえば、古墳の周囲に掘られた土坑に馬を埋葬する例、井戸の中に牛の頭を埋める例、水田の畔に穴を掘り牛馬の下顎骨を埋める例、川の跡や溝から馬の骨が出土する例等があります。

これらの動物に関わる祭祀は、文献史学や民俗学などの研究成果から、死者への埋葬儀礼（殉殺）、井戸の廃絶時の祭祀、雨乞いのため水神へ捧げる祭祀、滝壺などへ不浄なものを投げ入れることで神の怒りを生み、雨を降らせる祭祀、農耕の豊穰儀礼などが考えられます。一般に、川の合流点は古くから神が宿る神聖な場所とされ、祭祀場として使われることがよくあります。今回の調査でも弥生時代後期から中世にかけて長きにわたり、何らかの祭祀が行われたことを想像することができます。12 世紀末から 13 世紀頃の土師器皿や木製品も多数出土しています。

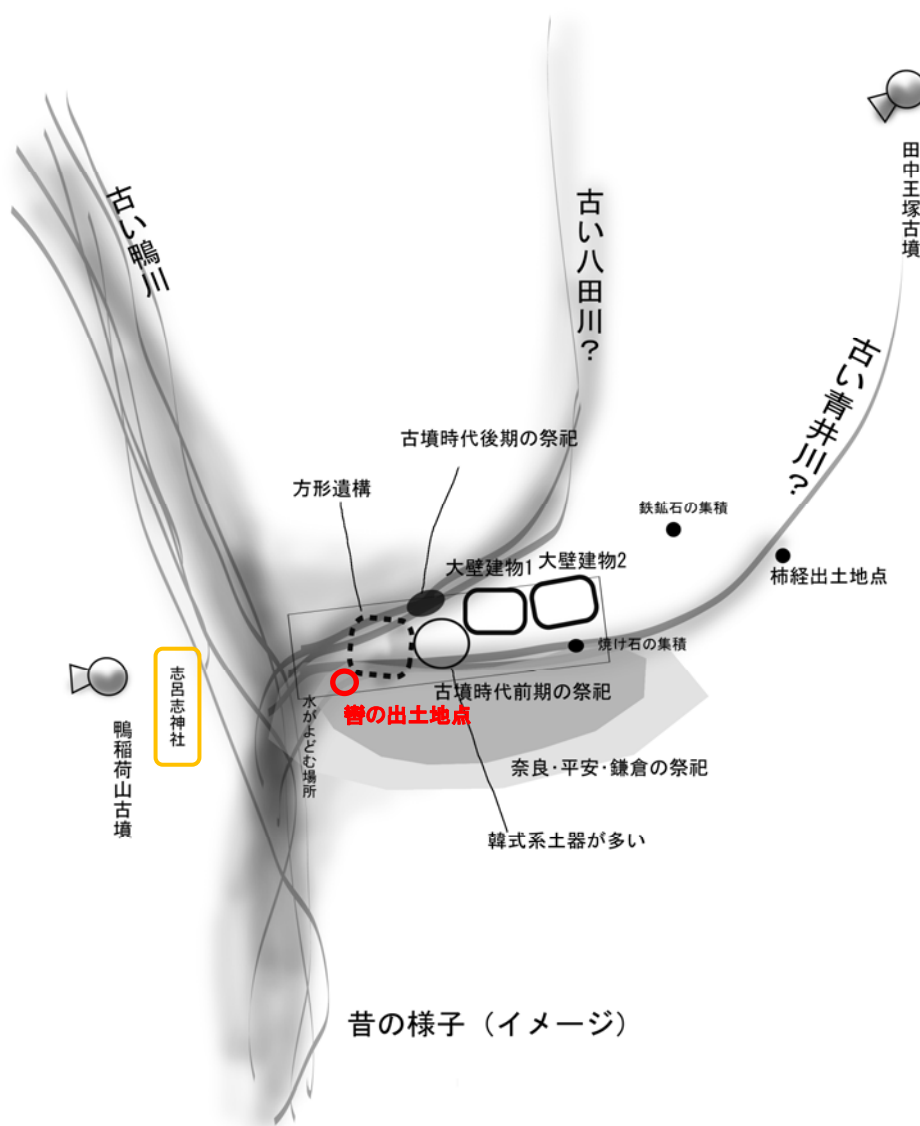
これらのことから、当遺跡の川跡から出土した馬の歯や骨は、神が宿る神聖な場所とされる川の合流点で、雨乞いを目的に水神へ捧げるため、川に投げ込まれた馬のものと推定する

こともできます。ただ、轡を装着していた馬が対象となったのか、轡は別の要因であったのかは、今後の発掘・整理調査（骨はどの部位なのか、他に祭祀に関わる遺物がないかなど）を経て、検討する必要があります。

いずれにしても、今回出土した鎌倉時代の轡は、出土資料としては初めての資料であり、中世の馬具の変遷を考える上だけでなく、馬に関わる祭祀を考える上で貴重な資料と言えます。



南東から調査地を望む



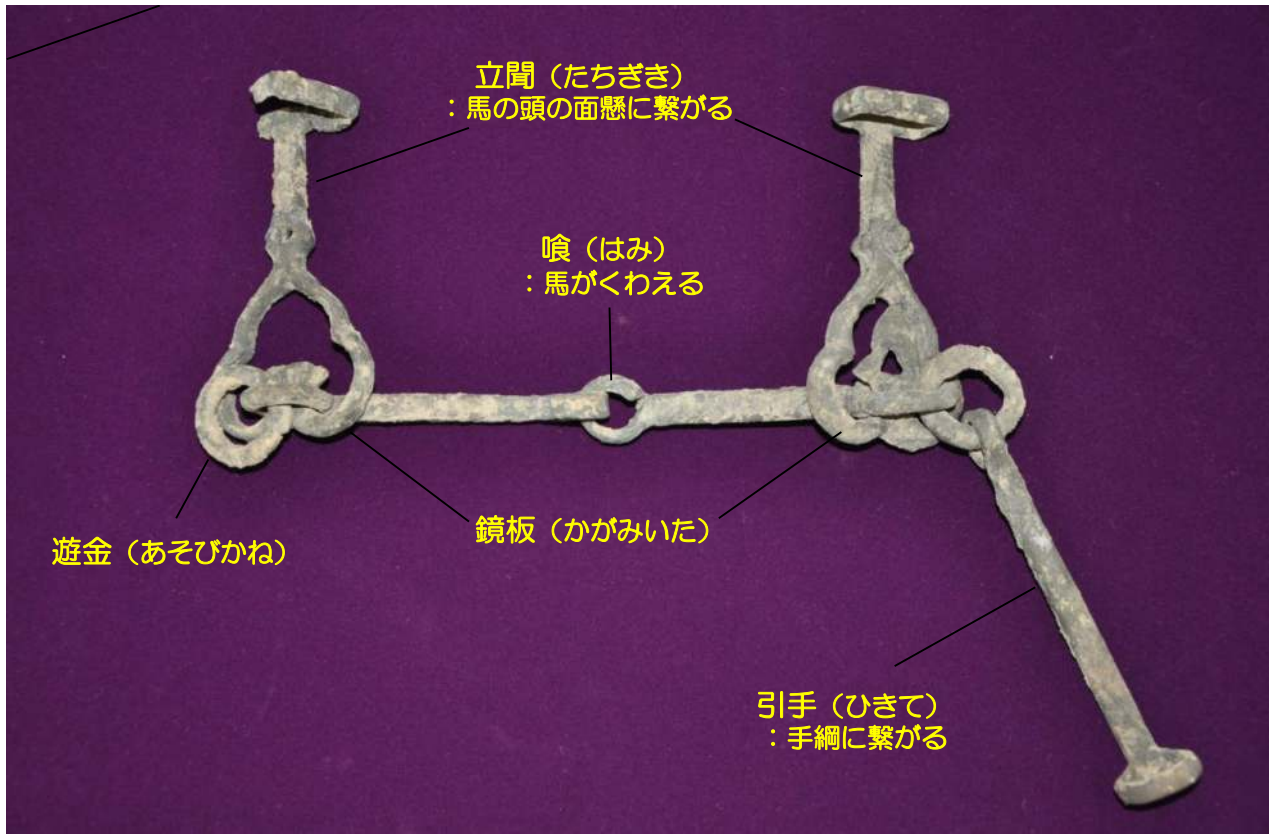
## 天神畑遺跡出土の轡について

轡（ハミ）の形態は、鏡板（頬板）の形状が杏（アンズ）もしくは銀杏の葉を象っていることから杏葉轡（ぎょうようくつわ）と呼ばれている。杏葉轡の伝世品は、極めて少なく東京御獄神社の国宝円文螺鈿鞍付属の杏葉と宝珠を透かす轡（鉄 13世紀）、東博の重美の杏葉轡（鎌倉時代 銅・鍍銀）、栃木二荒山神社の国宝唐鞍一具の杏葉轡（金銅製 14世紀）、京都宇治の大宮神社伝来の高津古文化会館蔵の杏葉轡（鎌倉時代 鉄・銅）などのものがあるが、これらは、鉄製や、銅に鍍銀、銅で鏡と立間を銅板で包んだりしており、これらは唐鞍の皆具の一部として神社に奉納されたものと考えられる。

高島市出土のものも鏡板の形状は杏葉轡に違いはなく、しかも出土品としては他に例を知らない。鉄地だけで作られており、シンプルで実用性の高い中世の武家の轡とも考えられよう。絵画では国宝の『平治物語絵巻』や『蒙古襲来絵詞』など戦記ものにそれらは表わされているが、現存するものは極めて少ない。杏葉轡は平安時代から室町時代に亘って使用されたが、本品はその古例の一つで、下っても鎌倉時代の作と考えると不思議ではない。

また同轡がどのように使われたかどうかは分からないが、馬具を装着したまま、頭部に轡を装着したままの副葬例は、古墳時代にはしばしば見られるが、奈良以降の例は少なくなっている。しかも同遺跡が川の合流地点にある古代の祭祀遺跡であり、古墳時代から奈良時代の祭祀には川の澱んだ場所や沼地で行われ、馬の頭骨や歯を遺棄した例は多いが、同轡は、古い祭祀遺跡に鎌倉期以降に混入された可能性が推測される。また付近に神社、志呂志神社があり文治3年に源頼朝が社領を寄進しているほどで、この轡も有数の武将により神社に奉納された可能性が高い。また同轡は先の4例よりシンプルな杏葉轡であるが、使い込まれた磨耗痕は見られず、轡（ハミ）の一部である片方の遊金（あそびがね）に結んだ紐の布らしき痕跡が認められており、そうであれば貴人の馬を引く、あるいは武将の馬を引くための差縄（さしなわ）か引き綱（手綱と異なり、馬をつなぐ際にも利用）であろうか。いずれにしても源平期の有数の武将が戦勝を祈願し奉納していたものが、その後の戦乱か、何らかの理由で、天神畑遺跡に混入したものとする。

(財) 馬事文化財団 馬の博物館  
理事・学芸部長 末崎真澄



鏡板と立間 (左)

鏡板と立間 (右)

天神畑遺跡出土の轡 (くつわ：鎌倉時代)



立間と引手の先端の形状



馬具の名称  
 (『新版 日本史辞典』角川書店 より)



絵巻物に描かれた轡  
 『蒙古襲来絵詞』(宮内庁三の丸尚蔵館所蔵)  
 (「日本の絵巻 13」 中央公論新社発行 より転載)

参考資料